

自然性としての子ども

～2007年度京生研基調に少し関わりながら～

滝花利朗

学校という物理的場所での実践現場を離れた者が、現にその現場で奮闘している仲間の実践に対して何事かを発言することにどんな意味があるのか？仲間にとっても、自分自身にとっても。

退職しても研究会に残り続ける存在になって、何かを発信するときには常にこのことを考えます。そして、ひょっとすると、これは研究者の心境に近いのかもしれないと思ったりする。

どんな意味があるのか？自問した上での結論。

- ①現場の仲間と比べて、時間的にゆとりがある。そのゆとりを用いて、『97年度京生研基調提案』で牧本さんのいう、教師の「知恵と目と技」の「知恵」の拡充に貢献できるのではないかと、つまり、レポートや書物になった教育の知恵の世界を涉猟して、現場の仲間と役立つであろうと思うことを選択・概括して伝えることは、意味あることではないだろうか。それは何よりも現場教師の時間的節約になる。（そのためには、その選択・概括はできる限り偏りや誤謬のないものにならなければならない。それは発信者の責任である。）
- ②しかし、それだけでは「サービス化」してしまう。「サービス」は一方向的な行為であり、それには「独善性」と「恣意性」と「無責任性」が付きまとう。しかし、「働きかけるものが働きかえされる」という原則はどんな場合にも適用される。「私」が発信する。そして、その行為そのものが「私」に「返信」を迫ると共に、具体的な仲間からの「返信」が「私」の「発信」の意味を問い返す。それは以後の「私」の「ものの見方考え方」に影響する。
- ③「人格の完成」を目指すのは教育だけの目標ではない。「私」は、今よりももっと人格の完成をめざしたい。それは「社会的自己」の発展を、ということと同義である。この要求が、「私」に発信を迫る。「共感的指導」（課題を抱えた子どもに対しても、リーダーとの対話にとっても）の成立要件は（ということは、「共闘的指導」「共生的指導」への発展要件は）、この指導者自身そのものが自分自身を人格未成熟（課題を抱えた人間）と自覚するところにあるのだと思う。
- ④現実問題としては、僕は、今、24戸の自治会の会長として、集団づくりをしていると思っている。相手は大人ではあるけれど、みんな課題を抱えている。「交わり」も「自治」も追求しなければならない。みんなから疎外されて、活動にほとんど参加しない「不登校」のような人もいる。ここでは、学校におけるような「能力主義」はないけれど、個々の生活には新自由主義的なものが学校以上に侵入している。かつての共同体が破壊はされていないけれど、この10年ほどの間に、「自己責任」の考え方（互いに持ちつ持たれつでやりましょうという考え方の反対）は強まってきた。つまり、孤立化が進んできた。しかし、一方で、僕を含む団塊の世代の5、6人は、これに対抗しなければという考えで一致している。僕は彼らに支えられながら、自治会担任としての集団づくりを進めている。その際、京生研・全生研での学習（学びなどと言いたくない。学習でいいではないか）は、とても役に立つ。

今のところ以上のような意味を自覚して、発信を続けます。

京生研大会の楠先生の講演を聞きながら思っていたこと。「うわー、人間関係ばっかりだなあ、しんどいなあ。ぎゅうぎゅうづめだなあ」。

それについて帰ってから考えたり、読み直したりしたことを書きます。

養老孟司対談集『脳が語る科学』（1999年、青土社発行）の中に、今森光彦さんや宮崎駿さんとの対談がある。今森さんとの対談の表題は『『里山』の環境と『里山』が育む心』。宮崎さんとの対談名は「もののけ姫の向こうに見えるもの」である。

まず、今森さんとの対談の中で、僕が「そうだ！」と受け取った部分を飛び飛びに抜粋する。長くなるけれど、後半の、実践への言及にはどうしても必要なのです。（ 線は滝花）。

養老「虫好きな人間は、自分の経験から、人間は好みが違って当たり前だということをよく知っているわけ。だから、他人に対して寛容です。」

養老「今の人は本当に物の見方が全部一律でしょう。」

養老「要するにディテールがなくなっちゃうんだ。」

養老「（昆虫採集では）なんとも説明のつかないようなものが次々に出てきて、改めて頭の中でもう一度パターン認識を構築し直していくんです。絶えず自分の認識に訂正を要求されるというのが自然のいいところですね。」

今森「結局、昆虫のおもしろさっていうのは、自然のおもしろさなんですね。」

養老「今の人はそういう感覚がほとんどないですね。さっき、今の人は乱暴だと言ったけど、実際に、何でも自分の思い通りにしようとするでしょう。（略）僕は最近気がついたんだけど、もう少しみんな“手入れ、”ということをまじめに考えたらどうかと思うんです。」

今森「とおっしゃいますと？」

養老「“手入れ、”というのは、本来自然が勝手にある方向に動こうとするのを、人間が少しずつ自分の都合のいい方向に手を加えることなんです。田んぼなんかも、人間が無理やり作ってもだめで、相手の性質に沿って人間が手を加えていくと、非常に見事なものができる。」

養老「この感覚（手入れ）は、日本人が、自然と折り合うことで育ってきたものだと思うけれども、今の人たちは自然との交流が昔ほどないから、手入れの感覚がないんですね。一番ははっきりしているのは子供の問題。子供も基本的には自然でしょ。相手は自然にしていれば素直に伸びていくわけですよ。昔の親は子供の手入れができたけれど、今の親は自分の思い通りにしようとしている。教育もそうです。われわれの文化全体が、手入れという感覚を急速に失っていると思います。」

養老「日本のいいところは、ややこしい自然と折り合いをつけながら生きてきたところなんです。だから日本人はわりあいデリケートだったんです。」

今森「僕は自分が昆虫少年で、小学生の頃は図鑑を抱いて寝たりしていたんです。今考えてみると、昆虫との関わりの中で学んだものってすごく多い。昆虫少年たちに共通している精神的にナイーブなところや美意識も好きだし（略）」

次に宮崎さんとの対談の中で、僕が「そうだ！」と受け取った部分を同じように飛び飛びに抜粋する。

養老「それで僕は“この世界はものすごくディテールに溢れているんだよ、”という意味の象徴として、あのトトロの女の子の目つきが好きなんですね。こうやってものごとを見てりゃ、少しは見えるんだけどなあって。」

宮崎「その視線の矛先が、いまの時代、人間にばかり向いているというのは、ドキリとさせられます。実はこの前、ある小さな小学校の校長先生と話したときに、その校長が、『差別はなくなる』って確信をもって言っていたんですね。その先生が赴任してからその学校はガラリと変わって、生徒を見てもみんなイキイキしているし、校長が単に権力者として学校にいるのではなく、いい意味で教育者として生徒に接しているということがとてもよく伝わってきて、好感を持ったんですが、その先生が『差別はなくなる』と言う。なにが問題なんでしょう？もっと一人ひとりが強くなることなんでしょう？なんて聞いたんですが、昔を考えてみても、もっとひどいイジメや差別はあったけど、とにかくみんないろいろ切り抜けて、こんなに悲惨なことにはならなかった。

でもいま、養老さんのお話をうかがっていると、人間に関心が向きすぎていて、その結果『アイツが気に入らない』とか『アイツはダメなヤツだ』とか、人間に関

してばかりの話題ば（ここまで打ったところで右足の甲に何か触った。少し動かすとチクッと痛みが走った。あわてて椅子を引いてみるとムカデだった。そばにあった『生活指導』6月号で数回たたいて弱らせた。ティッシュにくるんで家の前の岸に捨ててきた。生き返るかもしれないが、もう一度ここへ来る可能性はない。自然が僕の部屋まで侵入してきたので、僕は「手入れ」をした。今年はムカデがやたら多い。たぶん雪が異常に少なかった今年の冬の影響だろうと想像するのだが、そして、そういえば今年はホテルも例年になく多かった。こんなの都会ではわからない。でも、これらは僕の生活の一部だし、僕の対世界関係を作っているものの一部だ。僕にとって対他関係の「他」は人間だけではない。）かりになるんだ、と。」

養老「イジメが深刻になっちゃう根本には、人間ごとにしか関心が向かない世界があって、昔からあったことが、実は拡大されてしまった。いや、拡大というか、世界が狭くなった分だけ、拡大されて見えるんです。」

養老「この前通りかかった教会の前に書いてあったんですが、マザー・デレサは『遠い人類より、隣の人を愛しなさい』って言ったそうですね。なるほどと思って帰ってきたんですが、あらためてそう言われると、確かに僕らは人類のことを考え過ぎていますね。それから未来のことも。なんでこんなに未来、未来って言うのか。子供の未来はつまんない大人って決まってるんですよ、僕たちがそうなんですから。(笑い)」

宮崎「いまの子供は物心ついた頃からずっと『間に合わなくなる』って脅かされ続けている。そうやって育てられた子供たちが、少女買春をやっているんです。そういう気がしませんか？小学校の四、五年生くらいで、『もうおまえダメだ』って選別されて、そのあと何年も学校へ通わなきゃいけないなんて拷問ですよ。なんでこんなことになっちゃったんだと思いますよ。」

養老「文部省が毎年行っている新任の先生方の研修に呼ばれたんですね。これが四百名の先生が船に乗せられて十日間海を旅するというプログラムなんですが、どの先生も『忙しくて海なんか見てる暇ないです』って言う。で、最後の十日目にね、二十人くらいのグループに分かれて討論の発表をするんです。僕もつき合っていて聞いたんだけど、なんとその話題が、いじめをなくすとか、落ちこぼれを作らないとか、全部人間関係に終始している。僕が期待していたのは全然違う話で、山登りの好きな先生が稀覯地の摩周湖で妙な石を拾ってきたとして、それを教室の真ん中においてどういう教材にするかとか、ヒヨコからニワトリを育てて、親になったら首を絞めてスープにして調理実習の食材に使うのはどうだろう、みたいな話だったんですけどね(笑い)、そんなのは一つもなかった。だって四百人が自由に討論したんですよ。その結論が全部人間関係についてなんだから、いま職員室で先生たちがどんな話をしているかもおのずからわかってしまうわけ。要するに、先生方の社会なんだ。つまり、自分たちの社会をどうするかについて話をしているんであって、子供についてじゃない。別の言い方をすれば、子供は完全に置いてけぼりなんだけど、それが置いてけぼりってことにも一切気づいていない。それはそうでしょう。だって船に乗って海も見ないんですから。波なんて見たってしょうがないと思っている。でも、その波こそが世の中そのもので、無意味に動いているものでしょう。ところが本来そういうものだという感覚からしてもうないんです。いかにこの社会に子供を適応させるかって、せいぜい善意で考えているわけです。」

長い紹介になったが、要するにこれらの討論に一貫しているのは、「子供も基本的には自然」、「今の親は自分の思い通りにしようとしている。教育もそう」、「いかにこの社会に子供を適応させるかって、せいぜい善意で考えているわけ」だと思うが、それならば、この考え方は僕らの考え方に近いのではないか。ところが、そう思いながらも、次の言葉を聞くと考え込んでしまう。

「いま職員室で先生たちがどんな話をしているかもおのずからわかってしまうわけ。要するに、先生方の社会なんだ。つまり、自分たちの社会をどうするかについて話をしているんであって、子供についてじゃない。」

僕らは実践について語り合う。自分の実践、自分たちの実践について。自分の実践をど

うすべきかについて。もちろんそこでは、子ども自身による実践、子ども同士のはたらきかけあい（集団づくり）こそが子どもを変えるのだということを基本に置いているはずだが、にもかかわらず、うっかりすると、子どもについて語っているようにみえながら、実は自分について語っているのだということがないだろうか。自分の実践をどうすべきかを最初に考えて、それに関わる限りにおいて子どもたちのことを考える、といったことが。もしそうなら、これは「今の親は自分の思い通りにしようとしている。教育もそうです」という養老さんの指摘に反駁できない。

僕は、31年間の実践を振り返って、今、「あれは自分のためだったのか、子どものためだったのか」ということを考えてしまう。

もちろん、今は一評論家である元東大医学部教授（専門は解剖学、趣味は虫集め、虫集めの世界にもう一度戻りたいと定年をまたずに退官）の言葉にそんなに過敏に反応する必要はないと思っはいる。が、逆に、教育学や現場の世界とは距離を置いたところから、しかも僕らが一見常識と思ってきたことを裏返しにしてしまう人から発せられる言葉だけに、いわゆる教育評論家や教育学者の言う「なんだか納得できるような」言葉とは異なる感じを僕は受ける。

特に、「子供も基本的には自然でしょ」という言葉と、「イジメが深刻になっちゃう根本には、人間ごとにしか関心が向かない世界があって、昔からあったことが、実は拡大されてしまった。いや、拡大というか、世界が狭くなった分だけ、拡大されて見えるんです」という言葉に、「そう言やそうだ」という納得をしてしまう。つまり、僕が普段は考えない根本的な、それゆえ「簡単な」原理をポンと出されて、「おお、そうか」と思ってしまう。そして、それは、「うわー、人間関係ばかりだなあ、しんどいなあ。ぎゅうぎゅうづめだなあ」という、「京生研大会の楠先生の講演を聞きながら思っていたこと」と響きあう。

こんなことは、現代の都会の学校に生きる人たちからは縁遠いことであり、本物の自然がなくなっているその環境の下ではどうしようもないことかも知れない。だが、どうしようもないと思って原理まで捨てることは、結局は現在への適応主義になってしまうのではないだろうか。

いや、都会の学校にも、この「簡単な」原理で理解できる子どもたちは存在する。

この視点から、これまでの『Kの世界』の実践記録をいくつか読み直してみた。

『Kの世界』（2004年夏の特別号）掲載のM実践「〇〇にとって居心地の良い教室とは」は、Rという子の居場所づくりを中心とする小学校5年の実践である。

Rと彼を取り巻く子どもたちは次のように紹介されている。

「幼い時からの暴力行為と、仲裁に入った教師にも暴言を吐き続け、カッとしたら止まらなくなるR、3・4年時に教師反抗、飛び出し、暴力行為などで、自分を浮き上がらせてしまったM、この2人以外は、いろいろ今までこの学年が抱えてきた問題とはほど遠い世界に生きてきたようなおとなしい子ども達。かろうじて、他の子どもに声かけができるKとWがいた。

Rは、4年時は、他のクラスの子どもの飛び出しと一緒に、チャイムが鳴っても教室に入らないことが増えた。その徘徊仲間達からも「絶交」を言い渡されることがあった。その中のH（隣のクラス）には、わびを入れ、関係を修復したそうだが、休み時間はずっとHのそばにくっついてる。春休みには、ケンカの仲裁に入ったと本人は言っっているが、日頃から気に入らないと感じてた同学年男子の顔を踏みつけたことで、その子の父親が激怒、公園に来てRを殴る事があった。子ども達からも、地域からも孤立、疎遠を強く感じるRと、教師・仲間不信のMに、まず教師がつながることをめざしたスタートだったが……。」（20ページ）

成育歴をはじめとするRの「縦糸」がほとんど記されていず、それゆえ彼の課題設定も明確ではないが、ここではこの実践を分析するのが目的ではない。このRという子をどうとらえるかが目的である。ともかく「子ども達からも、地域からも孤立、疎遠を強く感じるR」は、「2007年度京生研基調提案」で捉え直された子ども像に近い。

では、このRについて、彼が感情的に激化する時と、落ち着いているとき、さらには張り切るとき、うれしがるときに視点を当てて読み進めてみる。これは、『〇〇にとって居心地の良い教室とは』を読んで（佐々木健）の「Rと他者の関わり部分を取り出してみた」とも重なることであるが、私は子どもをどうとらえるかという時、その子が「落ち着いているとき」とはどんな時かという点に注目したいと思っている。

というのは、子どもが感情的に激化したりパニックに陥ったときは、誰にも見えるし、またそれが他の子どもにも関係するので、実践記録には多く書かれるが、子どもが「落ち着いているとき」は「普通」なので、あまり意識的に書かれることがない。しかし、落ち着いているためには落ち着いている原因・理由があるはずだ。「激化」と「普通」の両面から子どもを統一的にとらえないと、その子の全体にはたどり着けないと思うからである。子どもが「激化」したとき、教師は否応なく「どうしたのだろう？なぜだろう？」と考えざるを得ない。でも、「普通」でいる時は、「なぜだろう？」とは思わず、「ああ、今日は落ちついてるな」と安堵して済ませてしまうことが多い。それは、学級の中の「普通」の子（もちろんそれは言葉の本義通りの「普通」ではなく、「2001年度京生研基調」で取り上げられた「中間層」に属するものなのだが）に関心がいきにくいと同じ理由からではないだろうか。

始業式から3日後の教師の班作り提案に対して、Rは「班はいやや、うるさいし、一人が良い」と一人反対する。話し合いを進め、『班はクラスで仲良くなる第一歩』という意見が本流をしめる中、彼だけが反対し続ける。『もういいやん、おれ一人だけなんやから、ほっといてくれ。』というRの言葉に食い下がった。

イライラしたRは、廊下で隣クラスの子を殴る事件を起こし、その担任のY先生がRの話を聞く。やがて「Y先生から話を聞いてもらって落ち着いたのだろう、教室に戻ってきたRは今度はすんなりと、班に入ることを認めた。拍手が起こったとき、Rは照れていた。（尤も、このとき、Rは私のことを「気の弱い、頼りない教師だ」とY先生には話していた。）」

Rの中で、Y先生、M先生がどう映っていたかはわからず、Rの「班はいやや」がM先生に対する「試し」の意味合いも感じられるが、このRの「班はいやや」は、普通の気持ちをストレートに出したものではないのだろうか。他の子どもたちが納得しているかに見える「班はクラスで仲良くなる第一歩」は、教師から刷り込まれた「たてまえ」としての理屈であって、経験に裏付けされた本音ではないのではないか。「いろいろ今までこの学年が抱えてきた問題とはほど遠い世界に生きてきたようなおとなしい子ども達。かろうじて、他の子どもに声かけができるKとWがいた」子ども集団の中で、子どもたちは本心「班はクラスで仲良くなる第一歩」と思っていただろうか。

そうだとするなら、このRの「班はいやや」はごく自然な思いだといえる。「班はいやや」というRを、その他の子どもたちの側から異質（違っている、変わっている）と見るのではなく、Rの思いを普通ととらえて見れば、その他の子どもたちのほうが異質になる。

Rは「チャイムが鳴ってもたいてい観察池にいる。」「クラスの子ども達で迎えに行く日々が続いた。」

観察池がどんなものかはわからないが、想像するにそこには水や水草だけでなく魚や虫たちもいるのであろう。Rはそこで何をし、何に関心をよせ、何を思っていたのだろうか。クラスの子たちが迎えに来てくれるのを待っていたのだろうか。もしそうなら、彼は人間世界を思いながら自然の世界（といってもそもそもは人工的な世界であるが、でも、水を張られそこに生き物たちが自然に生育を始めたのなら、部分的な自然の世界と言える）にただ目を向けていただけなのだろうか。

そうは思えない。Rは、観察池という部分的にせよ自然の世界に入っていたと思う。記録の23ページには、自習時間に外に出てふらふらしているのを注意した子に暴力をふるったRに対し、M先生が「大バトル」「一騎打ち」をし、「最後に無理やり謝らせ」、「『ごめん。こんな形でしか、謝れないRだけど、許してやってな、』」と言うと、M子とS子も頷

く。」場面が記されている。その実践の可否はともあれ、「翌日、田んぼで虫を捕りながら、40分ほど遅刻してきたRを校門の近くで見つけてしばらく話をした。Rはいつもの態度は見せず、しばらく自分の取ってきた虫にこだわるふりを見せながら、担任と一緒に教室に入った。これ以降、目立った反抗や教師への暴言は減ってきた。」という記述が私には気になる。ここでも、Rはいつたいこの田んぼの虫取りをしながらどんな心の状態だったのだろうか。直感的に言うと、それはRにとって文句なしに楽しく落ち着ける世界だったのではないか。観察池の世界がそうであるように。「虫にこだわるふりを見せながら」とあるが、それは「ふり」ではなく、Rはまだ虫の世界にいるのではないか。だからこそ、「いつもの態度は見せず」、前日「バトル」し「無理やり謝らせ」た担任であるのに「一緒に教室に入った」のではないだろうか。

もっといえば、観察池や田んぼの世界が、Rにとって一番自分の存在が受け入れられる世界であり、つまり居場所であり、彼はこの世界での充足の中で、どうしてもトラブってしまう人間世界（きつく、辛く、しんどく、面倒な世界）への準備をしていたのではないか。準備が仕上がらない時は呼びに来られるまでその世界に没入していたのではないか。

観察池や田んぼの世界以外にも、似たような世界が記録には見いだせる。

林間学習の取り組みの「学年集会で、係に分かれて活動グループを作るとき、『やりたい係がない』と動かなかった。体育館で一人ぼつんと座り続けた。」「他の組の子どもたちの中から彼に誘いかける子どもが出て」「他の子どもたちも周りを取り囲んで、Rに声を掛ける。嬉しそうにしながらも動かないR。本当はかまど係になりたかったのだが、かまど係に決まっていたI男と再ジャンケンをやらせてもらったが、わざとジャンケンは負ける。」「林間学習のリハーサルも、かまど係の練習にいつのまにか入り込み」「当日は班活動が始まると、他の子の活動がなくなるぐらいに張り切って行動していた。」

これは、先ほどの「バトル」と「これ以降、目立った反抗や教師への暴言は減ってきた」より前のことなので、この時のRの落ち着きと張り切りようがどこから来ているのか不明だが、「林間学習」「かまど係」に私は注目する。いろんな林間学習があるだろうから一概には言えないが、でも、少なくともそこは人間関係ばかりの世界ではない。野生ではないにしても、「手入れ」された自然の世界が少しはあるだろう。でなければ「林間」ではない。

ところが教師は、このような取り組みにあたって、「自然とのふれあいを深める」などと目的には掲げるが、その取り組み内容の多くは「人間世界（人間関係）」に関わるものである。Rがなくなってしまった「生活係」もその一つだろう。もしあるとすれば「レク係」もそうだろう。林間学習は、自然の中で人間の生活をどうするかを学ぶ場所になっているのである。

Rがなりたかった「かまど係」は、直接の対象としては「火」や「木」を扱うものだ。人間関係を煩う必要は他の係に比べて少ない。それはRにとって、観察池や田んぼや虫たちの世界に連なる世界だったのではないか。

もうひとつ。『大造じいさんとがん』の人物像に共感したRは、積極的に発言したり、感想をノートに書くようになってきた。時には2ページにも及ぶ授業のまとめを書く」「休み時間にトラブっても国語だけは戻ってくるようになった。」

たぶん2学期の記録なので、ここに至るまでの実践の進行がRのこのような変化を促したのだろう。だが、それは「国語だけは戻ってくる」という限定付きの落ち着きである。おそらくRは「国語」に戻ってくるのではなく、「大造じいさんとがん」の世界に戻ってくるのである。これも想像でしかないが、Rはこの世界の「大造じいさん」にも「がん」にも共鳴し、さらには、両者の関係にも共感するものがあったから、戻ってきたのだ。その関係は、人間関係ではない。それは、Rが観察池や田んぼや虫たちの世界ともっている関係に重なる、あるいはそれを理想化した関係だったのであろう。

だが、人間は、自然の世界の中だけでは自立できない。ヒトは人の間で人間になる、というのは古来の真理である。観察池や田んぼや虫たちの世界との関係だけでは、Rは自立できない。そこを居場所としている限りは、彼は社会的に自立できない。たとえ、きつく、

辛く、しんどく、面倒な世界であろうと、そこへ入っていかない限り彼は人間になれない。

しかし、一方、観察池や田んぼや虫たちの世界がなければ彼は生きてはいけない。そこを通してでなければ人間の世界に踏み出していけない。そこはエネルギー充填の場所でもあり、感情や思考や認識の訓練の場所でもある。虫たちが思い通りにならないからと言って苛立つわけにはいかない。自然は自分を越えたものとして我慢し、忍耐するしかない。虫が死ねば「なぜ？」という思考をうながされる。どうすれば虫は死ぬのかという認識も与えられる。それらは人間世界に踏み出す訓練である。このことを、私は、少年期の自分の体験として、そして、今なおそうであるという経験として、実感する。

この実践記録について、最後に実践的な言及を一点付け加えたい。

Rという子を、以上みてきたような子どもと捉えるならば、彼を、彼が今いる世界からこちらへいっちゃいと引き上げるのではなく、彼の世界まで降りていく子どもをつくって、その子どもたちと連れ立ってこちらの世界に向かわせるようなアプローチの仕方はできないものだろうか。そうすれば、迎えにいった子どもも、しばらくRのいる世界を共有することによって、人間関係のみに充満された世界だけではない、もっと広い世界を体験して戻ってくると思うからである。そして、そのような体験は、いじめ問題についての理解を広げ、それに対する耐力をつけることになるのではないか。

つまり、それは、「イジメが深刻になっちゃう根本には、人間ごとにしか関心が向かない世界があって、昔からあったことが、実は拡大されてしまった。いや、拡大というか、世界が狭くなった分だけ、拡大されて見える」状況にのみこまれない認識を育てることになるのではないか。

ところで、このRという子のもっている世界は、子どもはそこで真剣に生きているのであるが、私たちの目から見れば遊びの世界である。未だ組織されない交流・交感の世界、つまりは「交わりの世界」である。Rはそこで自然物を相手に一人で遊んでいるのであるが、多くの子どもたちには、違った遊びの世界もある。それを実践的に意識して取り組んでいるものとして細田実践に注目した。

『Kの世界』（第49号、2006年秋）所収「連載第二回『転機』」、同じく第52号（2007年春）所収「連載第四回『居場所』」を読んだ。詳しくは述べられないが、細田実践の特色は何よりも「学級（内）クラブ」の取り組みにある。

まず、「連載第二回『転機』」から。

3ページ。3年生にいた「とても手のかかる3人組」T、K、Sを4年生で担任。

「TちゃんはKとSとの3人組で、授業にあまり参加せずしゃべりまくって大騒ぎをし、時には教室を駆け回り、廊下にも平気で出て行って走りまくっていた。中でもTちゃんはとても暴力的で、よくクラスの子や特定の弱い子を理由もなく殴って泣かした。」（以下3人の成育歴がかなり詳細に紹介されるが略。ともかく家庭的にネグレクトなどの課題を背負われ暴力や教師反抗を起こす、「寂しさを抱えて生きていた」子たちである。）

中でも、Tちゃんの課題がもっとも重かった細田さんは、「Tちゃんとの信頼関係づくりを全力をかけて取り組み、私を介してクラスの子とTちゃんとの交わりをつくる事、学習の中でやれば出来るという自信を回復させる事の2つを実践の柱にしようと考えた。」

将棋好きなSと始め、T、K、さらには他の数人も入って「将棋クラブ」。

一時入所した児童相談所で習ってきた、こままわしをTと始め、やがてS、Kも加わった「こまクラブ」。クラスの子も参加しての「ケンカごま」への熱中。

「Tちゃんは、こままわしの中では自分勝手なちょっかいを出しながら遊んでいたが、友達に文句を言われたり諷められたりしながら楽しんでた。トラブルはほとんど起こさず穏やかにすごすことが出来た。」

Kは「体育でやったバスケットで頭角を現し」Tやクラスの男子にも声をかけて、熱中。

Sは「バスケットが苦手だったため、こまの世界に浸り切り」。

やがて、6年生を送る会では、全員が合奏している前で、3人でこままわし。

というように、ここには、とても楽しそうに遊び、活動する3人やクラスの子たちが描

かれています。細田さんは「自分が生かされる場所があれば、TちゃんもKもSも活動に参加し自分の役割を果たすために頑張れるんだということを実感できた一年間だった。」とまとめている。「自分が生かされる場所があれば～」これは、教育上きわめてシンプルな原理である。

いや、教育だけでなく、大人も含めた人間を動かす原理である（自治会運営でもこのことは痛感する。「大人も含めた」と言ったが、むしろ大人の世界でこそこの原理は適用しなければならないのかもしれない。子どもたちは、少々原理に外れたことでもそれが教師の「指導」であれば、「仕方なく」従ってくれるから。私たちは子どもが「素直に」「自主的に」動いたと思いついでいるが）。しかし、シンプルであるということと簡単に実践できることとはつながらない。むしろシンプルであるがゆえに具体化するのには困難だと言える。複雑多様化を極める教育世界で、実践家はもっとシンプルな原理にこだわっていいのかもしれない。

それはともかく、この細田さんのまとめにからめて私なりに言い直すと、このT、K、Sの3人にとって、遊びの世界は、「自分が周りからどう思われているか」とか、「あいつとの関係をどうしようか」とかというような、人間関係について深刻に考えなければならぬ世界ではなかった。前述のRはそれを考えなくてもよい世界の中で、今年度基調に絡めていけば、「自分を人格的に侵害してくる者のいない世界」で、精神的に安定した時間を過ごしていた。この3人も、確かに人間の世界にはいるが、そこでの深刻な人間関係は、遊びという活動を媒介されることによって、ずいぶんと薄められる。熱中しているときにはそれは完全に忘れ去られる。「自分が生かされる場所」とは、「対他関係を深刻に考えなくてもよい場所」であり、だからそこは「思い切って自分を出してもいい場所」であり、「頑張れる場所」になるのである。さらに、そこでの自分の行動が評価されれば、遊びが終わってからも彼は、恐れていた人間関係世界の中でも、自分を信じていいのだという本当の意味での「自信」をもって、これまでの自分を超えていけるのである。

思うに、「仲良し」という居場所が人間関係だけのものならば、そこでの子どもは、この関係がいつ切れるかという不安を抱えながら生きているはずである。その意味では人間関係だけの「仲良し」という居場所は、そこで暮らす子どもにとって「かりそめの場所」であり、Rのような、人間のいないところに居場所をもつ子どもにとっては、そこは絶対に崩れない「安定した場所」になるのである。少なくとも虫たちは彼を困らせることはあっても、彼の人格を傷つけることはないから。

また、T、K、Sの3人にとっての遊びの世界も、そこでは遊びのうまい下手はあり思い通りにならないことはあっても、それは自分に発した結果であり、仕方がないことであるから、「友達に文句を言われたり諫められたりしながら楽しんでた。トラブルはほとんど起こさず穏やかにすごすことが出来た。」のである。

この「仕方がない」という思いを持つことはとても重要なことだと思われる。それは自己抑制、忍耐につながる思いだからである。虫たち（自然の世界）は思い通りにないことがある、でも、相手は虫だからアタルわけにはいかない。こま（遊びの世界という自然）は思い通りに回ってくれないことがある、それは自分の技術不足だ、誰にアタルわけにもいかない。仕方がない。

細田さんは7ページで「孤立化させられバラバラの群れとなっている子どもたちをつなぐアイテムを、子どもたち自身に選ばせ決めさせることの大切さを述べている。ここでのアイテムは、私の言う「媒介するもの」と同じである。子どもの交わりを媒介する手段としてのアイテム。2007年度京生研基調は、今日「教師と子どもとの直線的な対応」だけでは個人指導が成立しがたく、「教師——複数の子どもを」通して、課題を抱えた子どもとの対話を提起しているが、それは、言い換えれば、「複数の子ども」「その子に最も近い子ども」を媒介にして対話を成立させようということだろう。とすれば、「直線的」というより「直接的」といった方がいいのかも知れない。

さて、細田実践のもう一つの方、「連載第四回『居場所』」では、12ページに出てくる「リョウとトカゲ」に目を引かれた。これまでの私の言述からして、なぜ目を引かれたか

は「リョウとトカゲ」という小題目から了解されると思われる。わたしが「いいな」と思ったのは、前頁の下に次の記述があるからだ。

「リョウの居場所を作っていく過程は、リョウだけでなくリョウの周りに集まる子ども達の居場所づくりでもあった。後に、スポーツでしか遊ばなかった子ども達も、リョウたちのひろげる遊びの世界に次第に入り込んで来たのだ。」

「リョウという複雑な家庭環境の子どもがいた。周りからからかわれることの多かったリョウの居場所を学級の中にしっかりと作ってあげたいと思った。」

「リョウが校舎の裏側でトカゲを捕まえてきた。とても得意そうな顔だ。『先生、これ教室で世話していいの?』と聞いてきたので、『もちろん、いいで。』と答えた。リョウはこういふときにとてもうれしそうな顔をする。『これだ!』私は、このトカゲをきっかけにしてリョウが生き生きと活動できる学級内クラブを作れないか考えた。」

リョウの「トカゲ」は他の子も巻き込んで「トカゲハウス作り」になり、「ハウス」は「それからしばらくの間教室の一角を占拠することになる。」のである。さらに、リョウたちの遊びは「紙で作る剣作り」へと移っていき、これにはさらに他の子ども達も参加して、「ほとんどの男子に広がり、それまでは休み時間にはサッカーしかしてこなかったI男までが熱中する」ようになっていく。

少年期における遊びの世界を経験することの大切さは、これまでも繰り返し言われてきた。それが何故だということも説明されてきた。私は、そのことを今回、子どもの世界における、人間関係だけではない世界の必要性という視点から、養老孟司の言葉に触発されて考えみたのである。そして、それは私自身の体験からくる思いでもあり考えでもある。はたしてこれは、都会という、人間関係と人工のビルに囲まれた仲間たちにも分かってもらえることなのか。それとも、私の独りよがりすぎないのか。できれば、応答を願うのであるが、忙しい日々を送っている仲間たちに強くは言えない。せめて福田先生でも応答して下さいたらなあ……。

最後に、二つ。

今朝、綾部市長宛てに要望書をつくった。明日送る。一人の自治会員から「田んぼ」の崩れについての要求があったので、これは公共の問題と考え直訴することにした。それは、これまで述べてきたことと同等の重みを持つ、私にとっての大切なことであり、エネネギーを使うに値する事柄である。

ふたつ目。夜から深夜の読書用に福井晴敏の『Op (オペレーション). ローズダスト』を読み続けている。やっと上巻が終わった。彼はたぶん映画にもなった『亡国のイーゴス』の作者。完全なエンターテインメント小説ではあるが、北朝鮮・日本・アメリカをめぐる国際関係と日本のナショナリズムが材料になっており、面白い。その上巻の中に次の記述を見つけて印をつけておいた。

「疎外されて、痛めつけられて、いまの世界には生きる価値もないって思ってる連中……。この世界に居場所のない連中は、どんなバカなことだってやるさ。そうすることで自分の魂が救えるなら」。かなり疲れた。これをM.L.に送付したら『～ローズダスト』の世界へ戻る。現実の人間関係世界を没却して。でも、たかがエンターテインメント小説でも、ふたたびこの世界に戻るなにがしかの慰みとエネルギーは与えてくれる、私にとっての「遊び」の世界である。